

つるつる? ざらざら? どきどき! オノマトペの美術

2022年6月30日(木) - 9月25日(日) 会場: 常設展示室

※月曜休館 ただし、7月18日(月・祝)、8月15日(月)、9月19日(月・祝)は開館、7月19日(火)、9月20日(火)は休館。
※ギャラリートーク 7月16日(土)、8月14日(日)、9月11日(日) 午後2時から



オノマトペってなに?

「オノマトペ」という言葉を聞いたことがありますか? なんだか不思議な響きの、でもどこか楽しそうな感じのする言葉です。もともとはフランス語の言葉で、日本語の少し難しい熟語では「擬態語」や「擬音語」ともいいます。しかし、こうした単語を知らなくても、「つるつる」「ざらざら」「どきどき」「わくわく」といった表現は誰でも使ったことがあるでしょう。たとえば、ガラスが「つるつる」、地面が「ざらざら」といえば、それぞれのものの表面の様子や感触が伝わります。また、緊張して「どきどき」、楽しみなことがあって「わくわく」といえば、目には見えない心の動きも想像できます。さらに、ものが落ちたときの音を「ことん」というか、「どしん」というかによって、落ちたものの大きさや重さまでなんとなくわかってしまうでしょう。このような、ものごとの特徴や状態を表現したり、音や声を再現したりするために生まれた言葉たちを、全てまとめて「オノマトペ」と呼んでいるのです。

では、オノマトペはどのような動きをするのでしょうか? たとえば、雨が降っている様子を伝えたいとき、「雨が激しく降っている」と表現すれば、出来事をほぼ客観的に伝えることができます。しかし、オノマトペを生かして、「雨がざあざあ降っている」と表現すれば、「雨が降っている」という事実ばかりではなく、「ざあざあ」と音を立てて強く降っているという印象、つまり、ある場面を目撃した人自身が感じた様子や主観を、その場にはいない人にも伝えることができるのです。ものごとの様子や音という、言葉ではないものをあえて日本語の五十音に置き換えることで初めて、他の人にも伝えられるかたちとなるのです。つまり、オノマトペとは、自分の「感覚」を言葉にできる手段といえるでしょう。

一方で、オノマトペは、いろいろなところで効果的に使われています。その代表的な例が、身のまわりの商品の名前です。毎日のように使っている台所用品や洗濯用品、スーパーマーケットでつい手に取ってしまった食料品、早く効いてくれそうな医薬品など、暮らしのなかで目にする様々なものの名前を思い浮かべてみれば、オノマトペを由来としている商品名が意外なほど多いことに気がつくでしょう。そして、名前のもとになったオノマトペは、ほぼ必ずといってよいほど、その商品のセールスポイントを端的にあらわした表現であるはず。これはつまり、商品の長所をオノマトペによって表現し、そのまま商品名とすることが、消費者にアピールするうえで効果的に働くからともいえます。言い換えれば、オノマトペとは、ものごとの特徴を凝縮して表現する言葉でもあるのです。

オノマトペは、「言葉ではないものを言葉にする」方法であり、また、「ものの特徴を凝縮する」表現でもある。であれば、難しく思われがちな美術作品についても、オノマトペに置き換えながら鑑賞することによって、その魅力やエッセンスを感じられるのではないかと。今回の夏季所蔵品展はそうした思いつきからスタートしました。この目録は、実際に展覧会を見る人にはガイドとして、展覧会に来られなかった人にも図版を見ながら楽しんでいただける読み物として作成しています。文章のところどころは空白にしていますので、ぜひ、あなたの心に浮かんだオノマトペを埋めながら、読み進めてみてください。



No.9 関野準一郎 《庄野》 1962年



No.10 徳永善彦 《雨のナザレ》 1975年



No.11 糸園和三郎 《雨の日》



No.12 亀山全吉 《雨》

似ているものを並べて比べる

とはいえ、いきなり、「作品を見てオノマトペを思い浮かべる」といっても難しいもの。そこでまずは、よく似た特徴を持つ作品をいくつか並べて、それぞれを比べながら、オノマトペとふれあっていきましょう。図版に挙げたのは、「雨」という主題が共通する4つの作品です。まずは、関野準一郎《庄野》(No.9) から。東海道の宿場の1つ、庄野宿(現在の三重県鈴鹿市)をモチーフとした木版画です。日も暮れて遅い時間でしょうか、薄暗い山中の宿場町を、_____と降る雨がいつそう重たく濡らしています。画面右下の瓦屋根は、しぶきに白く煙っているようにも見え、降りしきる雨の強さを物語っているでしょう。

続いて、徳永善彦《雨のナザレ》(No.10) は、激しい雨の中を行く人物を捉えたモノクロ写真です。_____と降り注ぐ雨や、地面に_____と強く打ちつける雨粒は、砂粒のように_____とした粗い質感を呈しており、逆光で浮かび上がる人物のシルエットをいつそう際立たせています。

一方、傘を差した人々の後ろ姿を描いた、糸園和三郎《雨の日》(No.11) では、雨のしずくがはっきりとは描かれていません。むしろ、人々が差している傘や、背景の淡い紫色の濃淡によって、雨の存在が暗示されているといえるでしょう。関野の版画や、徳永の写真のように、線状の雨が画面にあらわれているわけではないのに、どこか湿度も感じられます。ごく細かな霧雨、でも傘を差さなければ全身がじっとりと濡れてしまうような、_____と降り続くそんな雨でしょうか。

そして、亀山全吉《雨》(No.12) もまた、傘を差した人々が行く風景を描いていますが、これまでに見てきた作品とはかなり雰囲気異なります。画面は白を基調として明るく、青以外にも赤や緑、紫など、さまざまな色が点じられています。「雨」というタイトルでなければ、傘を差した人々を描いているともわからないほどに、モチーフの輪郭はゆるやかにほどけており、雨に濡れた窓越しに見るにじんだ景色のよう。憂鬱になりがちな雨の日が、_____という雨音を想起させるように楽しげに演出されています。

さて、4点の作品について、雨の表現に注目しながら見てきました。雨の降り方をあらわしたオノマトペといえば、「ざあざあ」のほかにも、「しとしと」「ぽつぽつ」などの表現がよく用いられますが、それぞれの作品について、みなさんはどのようなオノマトペを思い浮かべましたか? 1つの作品を見ただけでは、あまりイメージが具体的にならなくても、似ている作品を並べて比べることで、「こちらのほうがより〇〇だ」と、その違いが明確になったのではないのでしょうか。

よくわからないものを観察する

それでは、オノマトペに少し慣れてきたところで、今度は1つの作品をじっくりと観察してみたいと思います。取り上げるのは、豊福知徳による《風塔'83》(No.16) です。マホガニーという木の板を2枚組み合わせ合わせて作られた、上から下まで174cmもある背の高い作品ですが、まず目を引くのは、_____と連なったいくつもの丸い穴でしょう。横並びに5、6個ずつ、窓のように開いた穴をよく見てみると、その形が少しずつ異なっていることや、奥にある穴の「出口」のほうが狭いことに気づきます。また、穴と穴の接点はぎりぎりまで薄く削られています。ときに境界を破って穴どうしがつながっている箇所もあり、鋭くとがったその輪郭には、_____とした緊張感すらみなぎるようです。



No.16 豊福知徳 《風塔'83》 1983年

一方、作品の表面に目を向けると、ノミで浅くすくうように_____と削った跡が無数に刻まれています。その_____とした質感は、水面に立つさざ波や、魚の鱗のようにも見えてきて、まるで、三本脚でどこかへ_____と歩いていきそうな生命感もまっています。遠目には同じような大きさの穴がいくつも並んでいるだけに見えていたものが、こうして観察していくと、作品全体が生き物のごとく呼吸をしているようにすら感じられてはこないでしょうか。

作品が生まれたときを想像する

ここまで、ひとつひとつの作品を観察して、その特徴をオノマトペにする、ということが続けてきましたが、最後は、作品を作った人にまで思いをはせてみましょう。どんな作品でも必ず、それを作った人がいます。私たちがオノマトペとして凝縮させてきた作品の特徴は、誰かが手を動かして生み出した造形なのです。作品がどのようにして作者の手から生み出されたのか、オノマトペを使って「そのとき」を想像すれば、より深い鑑賞体験ができることでしょう。

中野恵祥《百合図皿》(No.34)は、一枚の銅の板を叩いて作られた作品です。皿全体の形は銅板の表から、レリーフ状に盛り上がった百合の図は裏から、何度も叩いて打ち出すことによって造形されています。百合の周囲に放射状に広がる模様は、金槌を打った跡。リズムカクに板を打つ_____という音が聞こえてきそうです。一方で、裏側から百合の形を打ち出すときには、きっと細いタガネを慎重に_____と打ち込みながら作っていったのでしょう。花びらの_____とした質感や葉脈の細い筋の表現はとても繊細で、これが硬い金属の板から作られた作品であることを忘れて、いつまでも見入ってしまいます。



No.34 中野恵祥 《百合図皿》 1930年代

そして最後に見ていくのは、いささか親しみにくく、ときに敬遠されがちな1点かもしれません。白髪一雄による《地鎮星小遮欄》



No.37 白髪一雄 《地鎮星小遮欄》 1960年

(No.37) という作品です。白いカンヴァスに勢よく絵具が塗りつけられているようですが、まず目を引くのは、画面中央を斜めに走る赤と黒の太い線でしょう。とりわけ、赤い線を観察してみると、たっぴりと乗せた絵具を、ひきずるようにしながら画面下部へと、_____と伸ばしていつている様子がよくうかがえますが、さて、いったいどのように描かれたのでしょうか。実は、この線を描いたのは画家の足。天井から吊ったロープにつかまって、床に寝かせたカンヴァスに乗り、絵具の上を_____とすべる……そんな大胆な方法で描かれているのです。ときには_____と尻もちをついてしまうこともあったかもしれませんが、足の裏に伝わる_____とした絵具の感触も想像しながら見てみると、作品との距離感がもっと縮まる気もしてきます。さらに、絵具の様子を観察すると、_____と飛び散ったような跡、_____と垂れたような跡などもあり、文字通り全身を使って制作に取り組む作家の姿が、目の前に立ち現れてきそうです。

オノマトペを使って作品と対話する

今回の目録では、みなさん自身にオノマトペを考えてもらいながら、似ている作品を比べたり、1つの作品をじっくり観察したり、あるいは、作品の特徴をヒントにして、作者の手や足の動きを想像したり、と少し変わった形で作品と向き合ってきました。作品をただ眺めているよりも、もっと作品に近づけたようには感じられませんか？ 作品を見た印象をオノマトペで表現することで、作品との距離はぐっと縮まるのです。オノマトペはいわば、作品と対話をするための言葉、言語ともいえるでしょう。

そしてみなさんはすでに、この「オノマトペ」という言語を十分に習得しているはずです。なぜなら、オノマトペにきまりはなく、日本語の五十音を自由に組み合わせれば、無限に作り出すことができるからです。展示室をぐるりと回って、ビビッときた作品を1点選んだら、最後のページを使ってのびのびと、作品とコミュニケーションを交わしてみましょう。展覧会を見ていない人は、この目録に掲載された作品について考えたり、別の展覧会にこの目録を持っていったりしてもいいですね。美術の歴史や、難しい用語を知らなくても、オノマトペを自由に生み出すことができれば、作品はきっとあなたに心を開いてくれることでしょう。(学芸員 月村紀乃)

最後は自分でやってみよう！

- ① 展示されている作品から1つを選ぶ
- ② 作品を見て感じたことをオノマトペで表現しよう
- ③ 書いたものを他の人と見せ合いっこしよう

この作品を選んだ理由は…

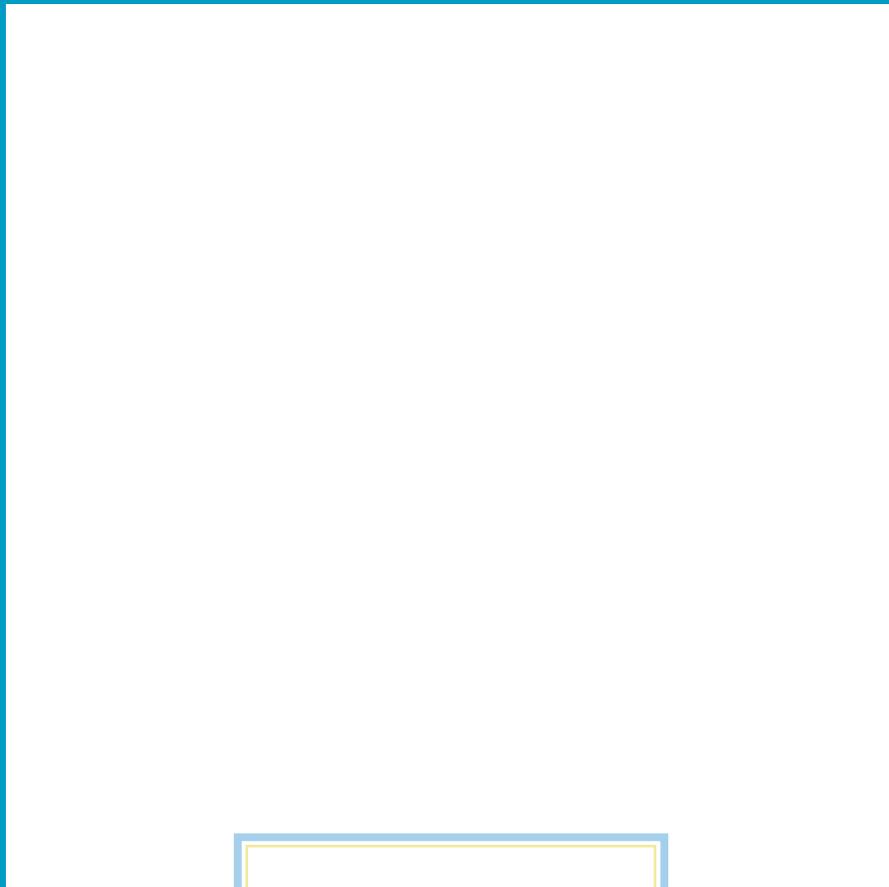
_____が
しているから

*例：表面が しているから

もしこの作品にさわれたら…

○○○○ していそう

*さわったときの感じを想像して
4文字のオノマトペを考えよう！



ここに作品をスケッチしてね

オノマトペを使って
この作品に自分だけの名前をつけよう！

この作品の見どころは…

_____が
○つ○○○ しているところ

*2文字目が小さい「つ」のオノマトペを考えよう！
例：「ふっくら」「しっとり」

この作品を自分の部屋に飾ったら…

心が しそう

*どんなふう飾るか思い浮かべて
自分の気持ちをオノマトペで表現しよう！



おしゃべりなオノマトペを
使ってみよう！

